

2021/10/8  
たいら 行雄

私は、日本共産党県議団として、県民連合より提案された「沖縄戦戦没者の遺骨等を含む土砂を埋立てに使用しないよう求める意見書」について、賛成の立場から討論を行ないます。

2020 年 4 月 21 日、沖縄防衛局は、辺野古への新基地建設を進めるもとにおいて、かねてから指摘されていた軟弱地盤が見つかったことにより、「埋立地用途変更・設計概要変更」承認申請書を沖縄県に提出しました。そして、その変更項目の中に、辺野古の埋め立てに使う土砂（岩ズリ）について、沖縄県内で調達する分の 7 割（約 3,200 万<sup>3</sup>m<sup>3</sup>）を南部地区の糸満市、八重瀬町から調達するとされています。

ところが、この南部地区は、先の太平洋戦争において国内で唯一地上戦が行なわれた沖縄戦最後の激戦地であり、東側に「ひめゆりの塔」、その先に沖縄戦にかかわり死亡した県民や国内外の兵士など、24 万人余の氏名が刻まれている「平和の礎」があります。

さらに、南側には多くの日本兵や住民が「集団死」した喜屋武岬、南東には 35,000 人余の遺骨が祭られている無名戦士の墓「魂魄の塔」が連なります。

このように、血に染められた南部の土には、未だに身元不明の戦没者の遺骨が静かに眠っており、その土砂を掘り起こし、埋立てに使う事は、人道上決して許されるものではありません。



沖縄戦では、当時 14～19 歳の生徒たちが学徒隊として戦場に駆り出され、物資運搬や負傷兵の看護だけでなく戦闘に参加させられた生徒もいました。最終的に、学徒隊のうち約半数が本島南部に投入され、多くが犠牲になりました。

現在 93 歳で元学徒隊のオバアは、「南部に撤退した日本軍は、住民を壕から追い出し、（戦闘のための）拠点を作りました。追い出された住民は、砲弾にやられ、あちこちに死体があふれていました。本当にかわいそうでした。あの沖縄戦で犠牲になった戦没者の骨で米軍基地を作るなんて絶対にやめてほしい。」と涙ながらに語ります。

住民が避難していた南部に日本軍が押し寄せ、住民は戦闘に巻き込まれました。

これにより糸満市・米須の住民戦没率は 59%に達したとのことでした。



また、福岡から出征した父親の遺骨も含め、遺骨収集のための NPO 法人を立ち上

げた 76 歳の男性は、「2005 年から 14 年まで遺体を探し、収容したご遺体は 100 体にのぼりました。父の遺体はまだ見つかりません。全ての遺体を収容するのは国の責任です。しかし戦後 76 年、国は遺体を放置し、米軍の新たな基地の埋立てに、ご遺体が混ざった土砂を使うなど信じられません。遺体が眠る場所は、お墓と同じです。その土を埋立てに使う。そんな国がありますか。これは沖縄だけの問題ではない。全国民が考える問題です。」と怒りを込めて語ります。

私も、沖縄の血が半分流れていますので、沖縄の人々の苦痛がよく分かります。しかし、今回の問題は、そのような狭い考えのもとにおいて判断してはならないと思います。

戦没者と、そのご遺体を冒瀆するような非人道的な行為を、時の政府が行なうことを許すのか否かが問われています。そして、そのことは、沖縄県民だけが考えるのではなく、全ての国民が考えるべき問題だと思えます。

「沖縄の戦没者は、国によって二度殺される」

このような、ご遺族の言葉を現実のものにしないために、私たちは議員である前に、一人の人間として、この問題に向き合わなければならないと思います。

よって、この意見書については、是非とも採択していただきたく、「賛成」を表明いたします。